ただの積み木じゃない！「KAPLA®ブロック」

どんな形でも作れる仏生まれのおもちゃ、ミズが販売中

一輪車を始めとして、様々な学校用品を扱っている協力会社のミズが「KAPLA® ブロック」を取り扱っています。フランス生まれのブロックで、パーツはたった1種類。フランス海岸松から作られた、1：3：15の比率の細長い板です。1987年に発売されて以来、世界中でおもちゃに関する賞を数多く受賞してきました。

KAPLAブロックの遊び方を学ぶ造形ワークショップ「出張アニマシオン」が都内の保育園で行われました。この日の講師は、日本にたった2人の公認インストラクターのひとり、志賀嶺司さん。

2歳から5歳の28人を前に、バラバラと豪快に箱からブロックを撒く志賀さん。子どもたちはもう大騒ぎ！

志賀さんはKAPLAブロックの特徴を、子どもたちにも分かるように説明します。「木で出来ている四角い形」「のっけるとピタっとくっつく。磁石じゃないのに不思議でしょ」「縦に置いても、横に置いてもいい。ふたつを混ぜてもいいよ」。そんな話をしながらも手を動かし、いつの間にか、目の前にタワーが出来ました。

積み方のコツを掴んだところで、いよいよ子どもたちが自由に遊ぶ時間です。崩れてもくじけずに積み上げる子、崩れないよう慎重に作業する子、友だちと協力して積み重ねる子、一人黙々とブロックに向き合う子……。中には抱っこしてもらって、自分の身長の2倍のタワーを作り上げる子もいました。

あまり聞き慣れない「アニマシオン」という言葉。「アニマ」の語源は、「命を吹き込む」ことだそうです。志賀さんは「ただ積むのではなく、1枚のブロックからモノを作り上げることで、『表現すること』に重きを置いているのがアニマシオンです」と教えてくれました。

後日、日本でのKAPLAブロック普及における第一人者で、公認インストラクターの冨安智子さんが財団事務所に来てくれました。遊ぶときのコツは「目で見て積むのではなく、バランスを指先で感じること」。

KAPLAブロックは、園児から高校生まで幅広い年齢に応用できる学習教材としてだけでなく、児童館での知育玩具、企業での社会人向けワークショップ、数学や建築を専門的に学ぶための教材、不登校児のための特別学級に活用している例もあります。豊かな感性の育成や心の安定も期待できます。購入のお問い合わせは、ミズのベルマーク係（0120-829-201・order@mys-co.com）まで。

台風被害の千葉・館山市の給食にミートボール

石井食品が3550食分を提供

今秋の台風で被災した千葉県館山市の学校に、協賛会社の石井食品（ベルマーク番号93）が、主力商品「イシイのおべんとクン　ミートボール」3550食分を給食用として提供しました。

館山市の教育委員会によると、市の給食センターは9月の台風15号で屋根に穴があき、調理場が使えなくなりました。続く19号台風で穴が拡大、センターの給食を利用している市内20の幼稚園・小中学校は、簡易的な給食か、弁当持参という状況が続いています。

ミートボールは調理済みのため、そのままでも食べられます。センターを通じて11月14・15・18の3日間で20校全てに届けられました。初日の14日に提供を受けた市立那古小学校（鈴木智夫校長、児童228人）では、子どもたちに一袋ずつミートボールを配布。みんな弁当箱に盛り付けるなどして食べました。子どもたちからは「お母さんに楽させたいから早く給食が復活すればいいなあ」といった声があったといいます。同校の吉野薫教頭は「子どもの3分の1は簡易給食、他は各家庭から弁当を持参しています。弁当が続いて飽きているところへミートボールを提供していただき、子どもたちはおいしいと喜んでいました」と話してくれました。

石井食品は千葉県が創業の地。ほかに市原市や南房総市にも、野菜入りのおかゆや食物アレルギーに配慮した非常食など約1万食を提供しました。同社顧客サービス部ビジネスサポートの髙橋俊一さんは「ミートボールとともに、子どもたちへ笑顔を届けられたことが本当に良かったです」と話します。同社は今後も継続して被災地支援を行っていくそうです。

活動開始から4年半　兵庫・三木市

担当部署の市民協働課を訪ねて

市をあげてベルマーク収集に取り組んでいる兵庫県の三木市。2015年に当時の三木市長とベルマーク財団常務理事が記者発表し、同年7月1日から取り組みを始めました。それから4年以上経ちましたが、順調に活動を続けてくださっているようです。近況を伺いに訪問してみました。

神戸電鉄の三木上の丸駅は、レトロな雰囲気が漂う木造の駅舎です。そこから20分弱歩いて、市役所に着きました。

ベルマーク運動の窓口は、市民生活部

市民協働課です。同課は、ボランティア、国際交流活動、みっきぃ夏祭りの運営、市民の生涯活躍の推進、区長協議会に関する業務、旧宅地の再開発など、市民活動に関するあらゆる業務を担当しています。

ベルマークを担当しているのは常深慶子（つねみ・けいこ）さん。市民協働課の職務分担の一つとして、他の仕事と並行しながら業務を進めています。

市内10ヵ所にある市立公民館のほとんどと市役所の総合案内前に回収箱を置き、市民に協力を呼びかけています。市役所内では職員が利用しやすいよう、8カ所の湯沸かし室にも設置しています。マークは2カ月に1度、市民協働課に集約します。集まったマークは3つに分け、①ベルマーク財団に「震災マーク」として寄贈②公民館の備品購入③市内の小中学校や幼稚園などの教育施設に寄付、という使い方をしています。

常深さんは「ベルマーク一覧表をわざわざ取りに来てくださった60代くらいの女性」や「1社だけで2000枚ぐらいのマークをくださった、ボランティアの

方」に会ったことがあるといいます。一方、同課係長の黒田正孝さんによると課題があるそうで、「ベルマークそのものの認知度は高くても、市民協働課がベルマークを集めていることは、まだまだ知られていないのでは」と言います。

とはいえ、2018年度に集まったマークは55,813.2点で、前年度の44,950点から1万点以上も上積みしました。「これからも右肩上がりにマークが増えていったら嬉しい」と常深さんは前向きに話してくれました。